

学徒動員と学べない不満をぶつけた日々



竹立 威三雄(たけだち いさお)さん(84) 昭和5(1930)年 大阪市浪速区生まれ。卸問屋の五人兄妹の長男として生まれる。中学校へ進学したが学徒勤労働員のため軍需工場へ。浪速区の自宅は昭和20(1945)年3月13日の第1次大阪大空襲で全焼した。この空襲により浪速区は区域の98%が焼け、昭和20年10月の人口は戦前と比べ4%となるなど、最も壊滅的な被害を受けた。終戦後に復学したが中退し、両親とともに厳しい家計を支えた。

大阪市立第七商業学校に通い始めた1学期の終わりから終戦までの約2年間、学徒勤労働員のため上新庄の大阪金属へ通い働きました。今のダイキンです。勤務時間は朝の定時から夕方3時まで。1週間に1回は学校へ行く日もあったと思います。今は名前と場所が変わって、西淀川区の淀川商業高校になっているかな。大国町から地下鉄に乗って梅田へ出て、阪急の北野線という路面電車で天神橋筋六丁目に行って、そこから旧京阪に乗って上新庄まで通いました。同じ工場には、私らのほかに私立の浪華商業学校、成蹊女学校、薫英女学校の4校から学生が集められました。私の持ち場は飛行機のラジエーター用部品の加工で、これはエン

ジンを冷やすための部品ですね。銅製の部品を塩酸で磨きました。塩酸は有毒ですから、体への負担が大きくて、終戦の2か月ほど前に胸を病んでしまい、病院へ行ったら肺浸潤と診断されました。当時は結核の手前と言われていて、危険ですが薬も何もない時代です。せめて栄養を取るために、医者からは毎日卵2個とホウレンソウとリンゴを食べるように言われました。戦時中なのでいずれも貴重品でしたが、3月の空襲で焼け残った自宅の倉庫に純粹の石鹼が残っていて、物々交換をして両親が手に入れてくれました。難波は商人のまちでしたから、調味料は足りないなりに揃っていました。

胸を患ったあとは、学校の事務を手伝っていたのですが、このとき校庭で空襲に遭ったことが強烈に記憶に残っています。校長先生と数人の生徒と事務員で、ひとつの防空壕に入った時のことです。六角形の焼夷弾が防空壕の天井を突き破って落ちてきて、私の隣に座っていた学生の頭を直撃しました。板の上に盛ってあった土と鉄兜を突き破って、頭を抜けてイスの板も突き抜けて地面に刺さりました。即死でした。燃えなかったのが不幸中の幸いでした。それ以上はよう語りません。

たまに学校に行っても、学校らしさはなくて、学校の校庭にはイモ畑があって、防空壕が転々としているだけ。学生時代という印象はほとんどありません。修学旅行ってあるでしょう。小学校の修学旅行は上六から伊勢神宮へ日帰りで行きましたが、私にとっての修学旅行はそれだけです。

お国のために働くわけですから、報酬もありません。市電の回数券をもらったのと、昼ごはんが出ました。でも当時は満腹を感じた覚えはありません。周りを見ても、ふっくらしている者はいませんでした。ごはんは真っ白なものではなくて、麦なんか混ざっていたように思います。少なくともパンは出ませんでした。だから、たまに出るおやつは嬉しかったですね。どんなものでも口にできるものがあれば感謝して食べました。

夕陽の決闘

戦時体制下でしたので、少尉クラスの軍事教官が1人ついていました。工場ではずるいことをすると叱られますし、一般の工員もおいでやないですか。学生を下に見ているようなこともあって、いろいろあったんです。苦しい思いもしました。

気持ちやすさんでいましたし、中学1年2年だと血気盛んといいますか、いきり立っていたというか。別の学校同士の生徒が工場で出会うと、それぞれ校風が違うので、何かあるんですよ。終業後には淀川で決闘もしました。今のいじめみたいな陰湿なものではなく、もっと正々堂々としたもので、ようやったことを憶えていま

す。浪華商業学校といたら、野球の名門校やないですか。学校で男女が区別されていたから、工場で男女が出会うのが珍しくてね。ケンカは女子校の生徒がいた影響もありましたかね。

戦争中は反発するようなことはありませんでした。当たり前という感覚です。工場で働くことにも疑問を感じませんでした。これが教育なんですね。中学校では漢文を習っていましたが、終戦後学校が始まって習ったのは英語でした。先生は何を教えたらいいいのかという感じで、迷いはったと思います。野球でも終戦を境に「ストライク」や「ボール」ですから。

大阪大空襲で自宅が全焼

私の人生は、家に焼夷弾が落ちてから変わってしまいました。バケツの水やホウキで消えるような火ではなかったのに、防空頭巾や着ているものを水で濡らして、合図をして高島屋（現在の南海なんば駅）を目指して走りました。オヤジは43歳、私が13でした。着いたら濡らしたものはみんな乾いていましたが、その後の記憶はありません。気が付いたら朝になっていて、周りにあった家が一夜にして何もないんです。大きなつむじ風が吹いて、怖かったですよ。今年の3月13日は近くのお寺へお参りに行きました。浪速区では2000人くらい亡くなっていますから、大阪の3月13日は忘れてはなりませんよとずっと言い続けています。

浪速区は98%が焼けてしまって、私の家には田舎がなかったのに、我孫子の浪速高校前に住んでいた親戚を頼って一家7人が1か月くらい世話になりました。そこから阿倍野の昭和町へ一家で引っ越しました。全部焼かれて何もないでしょう。私が長男で中3、一番下は乳飲み子で1歳くらい。両親にしたら非常に苦しかったと思うんです。収入がまったくなくて無一文になりました。あの当時は政府の補助も何もないやないですか。中学3年でしたが、学校に行っても生徒が授業をボイコットする同盟休校で勉強はできないし、家に帰っても生活が厳しいので自分から「学校を辞める」と言うたんです。下に4人おりますし、おじいさんもいて、家族の暮らしを両親がすべて支えるわけです。貯えもそんなにありませんし、インフレですからあっという間に消えてしまいます。

学校を辞めると言ったら、校長先生が「辞めんといってください」と言いに来ましたし、両親も止めてくれましたが、家の商売と言っても売る物がないじゃないですか。焼け跡の電信柱を掘りに行きました。地中に埋まった、燃え残った部分を掘りだして、乾かして割って薪にして売りました。でも地域へ帰らせていただいたおかげでみなさんにお世話になって、認めてもらいました。私は小学校しか出ていないけれども、社会勉強はたくさんさせていただきました。

⑥竹立威三雄さん

よかったなあと思います。学力もないのに地域の会長でも引いていただいた。地域の人たちは、オヤジの生きざまを見てくれていたんだと思います。

オヤジも私も意地になって、下の子たちには「いけるところまで行け」と言って、みな大学まで行きました。商売を継ぐために大蔵商業へ行っていた昭和11年生まれの弟は、いい友達に出会って、一緒に進学することになりました。神戸大学が受かったけど関学にも通りよったんです。でも、ちょっと贅沢な学校やないですか。入学金を払うために、オヤジから相談がありましてね、家の電話を売りました。あの当時は結構いい値で売れましたからね。焼け出された人はだいたい苦労しています。その分だけ強いですよ。少々のことではくじけません。

在学の証は戦災体験

浪速区では、小学校にあった名簿も記録もなくなってしまいました。唯一、入学した記録だけはありますが、卒業証書はありません。先日、保護司の叙勲が決まったとき、学歴を聞かれたのですが当時の記録がありません。淀川商業に行っても、私の代だけ名簿が残ってないんです。戦死した友達や焼けた家のことを話して、やっと「本当なんですね」と分かってもらえました。今はこの地域ではみな木津中学に行きますが、当時はバラバラでした。だから焼けてしまってますます分からなくなって、同窓会も開けません。お寺も焼けていますから、記録がありません。それだけ空襲の被害が大きかったということです。

元町小学校の石川校長先生が昭和58年に編集した「戦前史」に、昭和12年当時の私が写っています。これが幼少の頃の唯一の写真です。私は今の鉄眼寺のところにあった幼稚園の卒園でした。1クラス35人くらいで4クラスありました。小学校は浪速スポーツセンターのところにあって、卒業当時の全校生徒は1,000人規模でした。それだけの密集地帯だったんです。

子どもたちへのメッセージ

私は中学1年から学徒勤労動員で働いたために、教育を受けられないまま中退したわけですから、教育環境としては最悪でした。今はいい環境で勉強ができますから、教育を受ける機会があれば貪欲に受けてください。我々が勤労奉仕に行ったのも、教育のなせる業です。戦争というのはそういうもんやでということをお伝えたいですね。平和だということは意識しなければ分かりません。今とは違う時代があったということを知ってほしいですね。

こういうことはもっと語り継いでいかなければならないと思っています。焼け残ったところには語り継ぐ人がいるのですが、浪速区では資料をはじめ、あまりにも多くのものが焼けてしまいましたから。

母と子で乗り越えた戦中と戦後



京本 良子(きょうもと ながこ)さん(80)昭和9(1934)年 東淀川区生まれ。父親が4歳のときに戦死し、母と弟の3人家族に。戦時中は能勢へ疎開し、戦後は家計のために働く母の代わりに遺族会の活動を手伝い、大阪市遺族会婦人部副部長を担当。歌を詠んだり文章を書く特技を生かして、地元の新庄小学校の記念誌などにも寄稿している。現在も生家で暮らしている。

葬送の写真



この写真は、昭和14(1939)年の下新庄駅の東側から淡路方面から歩いてきた葬送の行列を撮影したものです。父が中国の広東で亡くなり、大阪の本願寺津村別院で慰霊祭をして、淡路で電車を降りて菩提寺の覚林寺へ移動しているところで

⑦京本良子さん

す。肉親ですので、列の前のほうに私もいるはずですが、当時4歳でしたので紛れてしまって分かりません。大きな花輪は、本願寺でもらってきたもので、最前列の人が持っている旗は葬送用のもので、まだ自宅に保管してあります。この日、出兵前に勤めていた新京阪が、天神橋駅から淡路まで遺骨を運ぶために特別列車を出してくれたそうです。父はマラリヤにかかり病死でした。痛い思いをしなかつただけ幸せだったのかもしれませんが。物心つく前に離れ離れになり、亡くなってしまいましたので「お父さん」と呼んだ記憶はなくて、いつも話に聞く「わが父」でした。少しよそよそしい感じですね。

下新庄の風景は、今から想像できないような畑が広がっているでしょう？じつは淡路駅の周辺もあまり建物はなくて、パラソルが見えるようなのどかな風景だったようです。

父は亡くなる1年前に兵隊になりました。靖国神社に父が合祀されることになり、小学1年生の私は母に連れられて一緒に行きました。ゴザの上に座るのですが、足が痛くなってしまい、憲兵に頭を押さえられたりもしました。境内の明かりが消え、灯籠に火が灯ると、遠くの方から馬の蹄の音が聞こえてきました。そして前から3頭目の真っ白な馬に乗っておいでのお方様が、昭和天皇陛下でした。12月8日の2か月くらい前でしたから、秋の大祭だったと思います。

33歳で未亡人になった母は、呉服屋さんから仕事をもらって縫い物をしていました。自宅で縫っていましたが、近所の方にもお仕事を手伝ってもらい、工賃を渡していました。また、その合間に軍服も縫っていました。裁縫店のチラシを残しています。ここに「貯蓄豊国は銃後女性の…」って書いてあるでしょう？こんな言葉は、今は使いませんね。国を守って働きましようという意味です。当時から電車の路線図もほとんど変わっていませんね。城東貨物線も変わっていません。私たちはこれを弾丸列車と呼んでいました。兵隊さんを送っていました。



京本さんの母・光子さんが自宅で仕立物をしていた頃のチラシ。右上には「貯蓄豊国は銃後女性の寸暇を利用して！」と書かれている。

親元を離れて集団疎開

東能勢へ集団疎開に行ったのは4年生のときです。昭和18(1943)年の秋からでした。出発する前に近くの覚林寺へご挨拶に上がりましたら、「ちゃんと仏さんを拝んでから寝なさいよ」とお数珠をもらいました。

疎開先ではちゃんと食べさせてもらいましたので、食べ物には困りませんでした。畑の収穫を手伝いました。周りでは誰もしていなかったけど、繕い物も見よう見まねでやりました。それでも欲しいものはあったので、ほかの子たちがしていたようにハガキに書いて、疎開先から母親へ送りましたら、母は「良子さんとの手紙は綴り方のお勉強ですよ」と諭され、これが基礎になり作文が上手になりました。ある日、雪の間から出ていた水引草を押し花にして母に送りましたら、「仏様にお供えするお花もない大阪ですのに、良子さんはとても優しく育てられて、母さんはとても嬉しい」と喜んでくれました。自分にとって、疎開の経験は人間形成のうえで大事な時期だったと考えています。そのときに母からもらったハガキは、私の財産です。



下新庄の実家の母から、疎開先の京本さんの元へ送られてきたハガキ。現在のハガキよりもひと回りほど小さい。

疎開先では、こんな話もありました。正月を迎えるにあたって全員にお餅が配られるのですが、前の晩、ある子どもが布団に入ると、隣の子から足をつねられました。「明日は餅をよこせ」という合図です。先生はそういうことがあるのを知っていますから、「きょうは食事の前にちょっと立って」と全員に言うんですね。仏さまのお側ですから、ちょっと立ってと。そうするとモンペの裾にお餅が隠してあるのが分かるんです。ばれてしまったら、またつねられてしまうんですね。

水商売をしていた母親のことを「親戚のおばちゃん」だと教えられていた子どもが、手紙を通して本当の母親だと知るなんてこともありました。離れ離れになると本当のことを言いやすくなって、人間模様が出るんだな、と子ども心に分かりました。離れることがいいとは思いませんが、私の場合はいい関係でした。

淡路の高射砲

父の命日だった3月19日のことです。父のお墓の隣にあった高射砲から撃った弾が米軍機に命中しました。母は運命的なものを感じて、落ちた飛行機を見ようと出かけたようですが、淡路駅の近くでは線路が飴細工のようにひどく曲がっていて、恐怖を感じてすぐ帰ってきたそうです。空襲では水源池をめがけて飛行機が飛んで来たと聞きます。私の家のある下新庄周辺の被害は少なかったのですが、一部に焼夷弾が落ちたところもあったようです。私は疎開していましたので、あとから聞いた話です。

疎開先の能勢の山奥から、家に帰りたくて大阪のほうを見ていました。すると大阪の空は灰色なんです。能勢は青い空なのに、どうしてなんだろうと。でも子どもでしたから、どうして大阪のほうは黒いのか分かりません。空襲でたくさん家が燃えると、決まってそのあと黒い雨が降ったということ、あとから知りました。

戦後の下新庄

弾丸列車（城東貨物線）は、最初日本の兵隊が送られました。終戦を迎えると、乗ってきたのは進駐軍で、乗車口からティッシュペーパーやチョコレートを撒きながら通り過ぎていきました。近所の子どもたちと喜んで拾いに行くと、「負けた国の者がそんなものを拾うな」と母親に怒られました。戦後に流行った「リンゴの唄」も、家ではろくに歌わせてもらえませんでした。そのへんが、普通の家庭と全然違うところでした。

貨物線では、農業がまた盛んになるにつれて牛や馬が運ばれて、やがてクルマが運ばれるようになりました。今はコンテナが運ばれています。私は疎開の1年を除いて、ずっと生家に住んでいますから、環境の変化そのものが歴史だと分かるんです。

終戦後は親について遺族会を手伝いました。夫が戦死したものと思って家に残された妻が再婚したら、夫が帰ってきたりして、いろいろあったのです。私の家は早くに父が亡くなった分、いろいろな事情が分かっているということで参加しました。母親は働かなくてはなりませんので、その代わりに会合でも「勉強は家に帰ってからやればいから、行っておいで」と言われて。遺族会は70歳までやりました。人間形成の面で育ててもらって、本当の奉仕というのはどういうことなのかを知りました。

母への思い

戦争中は母が子どもだった私たちを守ってくれましたが、育て方は厳しいものでした。それを受けとめるような気持ちで大きくなりました。母は、子どもの私たちに礼を言って亡くなりました。悲しんでいたら、お寺の住職が「親が親であってくれたことがどんなに幸せなことか」とおっしゃってくれて、ずいぶん励まされました。

終戦後は私も裁縫を教えて生活をしてきました。「縫った糸を始末する」といいますが、始末という言葉には、きれいに片づけることと、ものを大切にすることの2つの意味があるんですね。そんなことを思いついて、私の人生は親に導かれて生きてきたなと思います。

若い世代へ伝えたいこと

広東で父が亡くなって、生きて帰った兵隊さんの戦友会の人たちと一緒にその足跡をたどる旅行にも参加しました。聞いているのと行くのは全然違います。聞いていられないような話を聞いたりもしました。そこで感じたのは、過ぎたことを大切にしなければならないということです。そうしないから、こんな世の中になっています。みな、過ぎたことを思い出さないんです。返還前の沖縄にパスポートを使って行きましたが、その頃はひめゆりの塔もまだ整備されていなくて、かわいそうなくらいでした。今は語り部のみなさんががんばっておられます。過去に学ぼうという人がいたからこそ、あのような立派な慰霊塔が建っています。過去をおろそかにしてはいけません。

<取材メモ>

大正時代に建てられたという生家に暮らしている京本さん。戦災の被害を免れたこともあって、戦中・戦後の手紙や写真、道具などを大事に保管されておられます。当日は、疎開先で母親の光子さんと交わした多くの手紙や、貴重な写真をご紹介しますながらお話をうかがった。

3回も招集された夫との戦争にまつわる思い出



高橋 菊江(たかはし きくえ)さん (93) 大正 11(1922)年 岡山生まれ。
小学 2 年生で大阪布施の叔母の家へ。昭和 19 (1944) 年 4 月に高橋辰之助さんと結婚。辰之助さんは平成 19 年に他界しているが、区広報を見て「お父さんの戦争の時の勲章や奉公袋があるんだけど」と情報提供をいただき、インタビューではご主人との思い出を語ってくださった。

夫の高橋辰之助は大正 7 (1918) 年 8 月 3 日生まれ。今から 8 年前に亡くなりましたが、生きていたら 96 才になります。3 回招集されているんです。

1 回目は少年兵として篠山連隊に入って上海へ出兵しましたが、そこで負傷して昭和 18 年に招集解除になったみたいです。その後に誰かの紹介で彼に出会ったんです。昭和 19 (1944) 年 4 月、辰之助の姉の家にみな集まって結婚式を挙げました。戦争のまっただ中だったので質素なものでしたが、日本髪のかつらをつけて記念写真は撮影しましたよ。でも、その後はみなもんぺで質素な暮らしでした。お姑さんと一緒に中津本通で暮らしました。夫はその頃「警備招集」というものにかかっている、夜中に空襲警報のサイレンがなるたびに走り回っていました。その時の赤紙が 2 回目の招集です。届いた時に私が駅まで知らせにいったのをよく覚えています。当時武田薬品の十三工場で働いていた夫の帰宅を迎えに、中津駅まで赤紙を持っていたんです。それで家まで一緒に帰りながら「軍隊にまた行かないかんわ」と話していたことを覚えています。

⑧高橋菊江さん

結婚して間もないのに、空襲が激しくなるにつれ、さらに夫は3回目の招集を受けました。兵庫県の龍野に軍隊の本部があって、そこに配属になったんだと思います。(辰之助氏が書いた履歴書によると歩兵第八連隊)。

軍隊に招集されるとなかなか会えないでしょ。あるとき辰之助の連隊がある学校で訓練をしているという噂を聞いたんです。一目でも見れないかと思ってそこまで訪ねていったこともありました。遠くから連隊を見るだけなんですけどね。

空襲が激しくなるにつれて、中津にあった家は借家だったのでそこは明け渡して、私は姑さんと一緒に故郷の岡山に疎開しました。昭和 20 (1945) 年の8月14日、終戦の前日にたまたま私は夫に面会のために龍野を訪ねていました。本部では直接面会できないので、近くの民家をお借りしてそこに一泊泊めていただいて軍服姿の夫と会いました。偶然にもその翌日にその家で私は玉音放送を聞きました。

夫は軍隊の後片付けを終えて9月には岡山の疎開先に復員してきました。そこから、元々武田薬品に籍があったので10月頃には大阪の田川に家族で帰って来たんです。

=====
ご主人が戦時国債や勲章などを大切に保存されていた様子。貴重な資料は写真でおさめている。

